

## 「言葉が危ない」

2015年12月07日

歌人たちが「言葉の危機」を見過ごせないと、緊急シンポジウム「時代の危機と向き合う短歌」を開いたと報道されていた。出席したかったが、別の集会があったので断念した。最近の自民党政治家たちの横暴な言葉と無責任な発言は目に、耳に余る。

自衛隊員をイラクに派遣することになり、戦争できない日本は「非戦闘地域」に派遣するという事になった。その非戦闘地域はどこなのかという問いに、小泉元首相は「自衛隊員が行く所が非戦闘地域なんです」と答弁していた。驚いてしまった。

安倍首相はオリンピック・パラリンピックを招致する演説で、福島原発事故に関し「アンダーコントロール」と発言した。事故処理は全く進まず、放射能を出し続けている。安倍首相の厚顔な発言にあきれ果てた。

安保関連法が強行採決されたが、この「法」に関し、最も深い問題は言葉の扱いであると思っている。非戦を謳った憲法九条の言葉を内閣で勝手に解釈し、実際には、自衛隊を海外に派遣する。戦争できる国、戦争をする国に変えてしまった。言葉が失われた訳である。言葉が失われる時、真実はどうでもいいことになり、心に深い虚無感を醸成する。

憲法審査会で3人の憲法学者が安保関連法案は憲法違反であると証言した。これに対し、高村正彦自民党副総裁は「学者は字面に拘泥する」と言った。字面と正面に向き合うから、言葉に命が宿るのである。

170人を超す憲法学者たちが安保関連法案の反対声明を出した。菅義偉官房長官は「(合憲とする)憲法学者はたくさんいる」と言った。アンケートを取ったら、「たくさんは3人」であった。お粗末極まりない。

中谷防衛大臣は「現在の憲法をいかにこの法案(安保関連法案)に適應させていけばいいのか」と言った。憲法が国の最高規範であることを知らない大臣ではないか。彼は「弾薬は武器ではない」と他国へ武器供給をできる道を開いた。

磯崎陽輔首相補佐官は、安保関連法案の合憲性について「法的安定性は関係ない」と言った。平等な法の下でこそ国民の安全と安心が得られるのではないか。権力の中枢にいる人が、法治国家でなく、無政府状態でよいと言っているようなものである。

シールズ(自由と民主主義のための学生緊急行動)は自分たちの思想と言葉で安保関連法案に反対し、戦争する国にするなど声を上げた。武藤貴也衆院議員は「『だって戦争に行きたくないじゃん』という自己中心、極端な利己的思考」とツイッターに書いたという。あきれ果ててもものが言えない。

今、「言葉」に深い危惧を持つ。そして、これらの横暴な言葉と無責任な発言をした政治家たちを罷免できない状況に大きな恐れを持っている。自民党権力は一極に集中、肥大化し、何を言っても怖くはないと思っているらしい。怖れるどころか、安倍首相寄りの発言をする人が優遇され、高位に用いられているのではないか。

反対に、政府の意向に異議を唱える人々は発言する場を失い、物が言えなくなっている。そこでは、「見ザル、言わザル、聞かザル」の自己規制が働き、閉塞状況を生んでいる。

報道の自由度ランキングは180ヶ国中、日本は61位だそうである。報道の自由が確保されていない。今後、ランキングはますます下がっていくのではないか。言葉に命を宿すために闘っている人々に敬意が払われ、また、沖縄の辺野古新基地反対の闘いに連動して、人間の尊厳を守る生きた言葉を発することのできる国であってほしいと切に思う。